

本居宣長、大和への旅2

もとわりのりが
本居宣長ら一行六名は、吉野・飛鳥巡りの道中、明和九年（一七七二）三月六日（旧暦）に榛原（萩原）に泊まりました。

この日の夜は、風雨がひどく、宣長は吉野山の桜が散ってしまわないかと心配でなかなか眠れません。なぜなら、今回の旅の目的は、吉野の桜を見ることにあつたからなのです。宿の主人が夜中に起きてきて、「全くひどい雨風だなあ。これだけ雨が降れば、必ず明日は晴れるだろう。」と言っているのを布団のなかで聞き、宣長は「何とかそうあつてほしいものだ。」などと祈って眠りにつきました。

翌七日は、明け方から雨が止み、外を見ると雲もしだいに薄くなって、晴れ上がりそうな様子です。宣長は、「昨夜の家の主人の予想は当たっていたな。」などと思ひ、大変、喜びました。しかし、雨の後の道の状態は悪く、「山道は、より一層、状態が悪い。」などと聞くと旅人たちは、みんな、駕籠（かご）に乗って出発しました。

宣長ら一行も駕籠に乗って出発です。「駕籠は尻が痛く、朝のうすら寒い谷風までも激しく吹き入って、たいそう辛いけれど、行き悩む旅の心には、

全くよく堪えられて、徒歩で行くよりは、この上もなく良いものだと思つても、不思議だ。」などと『菅笠日記』に感想を記しています。

三月七日は、萩原から西峠、角柄、吉隠を経て、長谷寺、多武峰を訪れました。八日から十一日は、吉野、宮滝、飛鳥などを巡り、目的達成です。十二日は畝傍山周辺や大神神社などを巡り、帰途につきました。



長谷寺



吉野山（蔵王堂）

文・柳澤一宏（文化財課）



10月は「仕事と家庭を考える月間」です
〜東南アジアから来た看護師〜

「褥瘡」「蜂窩織炎」
この漢字、あなたは、何も見ずに書けますか。

これらはすべて医学用語で、褥瘡は寝たきり等で生じる床ずれ、蜂窩織炎は細菌等で皮膚内部に生じる炎症のことです。

政府の経済連携協定の一環で、東南アジアから看護師や介護士が来日、国家試験に合格するたぬ昼に病院等の仕事を、夜は日本語と試験の勉強をしています。この国家試験には、冒頭の医学用語も出てくるようです。

仕事だけでも大変なのに、9年間で130人が合格し、日本の病院等で献身的に働き、患者さんにも喜ばれています。

しかし、晴れて国家試験に合格したのに帰国して現地で就職する人もいます。看護師の一人にその理由を聞くと、「日本人は時間を守らない。遅刻には厳しいのに、終了の時間は守らない」のだそうで、これをツイッターで呟くと、日本でも多くの反響がありました。日本では、普通に近い感覚の話かもしれませんが、彼女達には、違うようです。これは看護師に限らず、日本

全体の問題ではないでしょうか。

現在、看護師の一部の職場では、所定労働時間の短い「短時間正職員」制度や夜勤の回数や時間帯を選択制にするなど、長く働き続けられるよう、個々の生活スタイルに応じた多様な働き方の普及に力を入れています。

ワークライフバランス（仕事と生活の調和）の必要性が相互に理解され、女性だけでなく男性、また来日した看護師にとっても、働きやすい職場環境を創ることが、求められています。

国では、長時間労働削減等による働き方改革を進めており、これは企業にも有益で、そこで働きたいと思う意欲ある人材が集まることも期待できます。みんなワークライフバランスの実現に向け、行動することが大切ではないでしょうか。

